

博報財団 第11回「国際日本研究フェローシップ」成果報告書

I. 研究成果概要

氏名	塚田 公子(ツカダ キミコ)
在住国名	オーストラリア
所属・役職	マコーリー大学・専任講師
招聘回(招聘研究期間)	第11回 (2016年9月1日～2017年8月31日)
受入機関	早稲田大学
招聘研究テーマ	異言語話者による日本語発音習得に関する縦断的比較研究
研究目的	本研究では母語の異なる日本語学習者による発音習得学習に貢献することを究極の目的として、音声の比較縦断的知覚実験を行った。具体的には、日本語音声で特徴的かつ習得が困難とされる促音・非促音(単子音・重子音)の同定を中心に、中国語または韓国語を母語とする留学生日本語学習者を対象に計3回のデータ収集を行った。同時に、類似する音声的特徴(例: Sete 「7」 Sette 「湯き」)を有するが、未学習かつ日本語とは類型的にも異なる言語(イタリア語)の単子音・重子音の知覚を調査することにより、外国語・第二言語としての日本語学習が他言語の音声処理にどのような影響を及ぼすかについても検討した。

研究成果概要:

「余暇」「四日」のような促音・非促音(単子音・重子音)の音韻対立は日本語音声のなかで特徴的なものであり、非母語話者にとって習得が極めて困難であるとされている。本研究では中国語または韓国語を母語とする日本語学習者の音声知覚能力を計3回のデータ収集を通じて縦断的に調査した。その際、やはり単子音・重子音の対立を有するイタリア語も刺激音として提示し、日本語の音声学習経験が未知のイタリア語の音声処理にも役立つかどうかを検討した。収集した学習者の知覚データはすでに処理・分析済みの日本語母語話者および日本語の知識を持たないイタリア語母語話者のデータと比較した。当初は外国語・第二言語としての日本語学習が学習者の母語の発音にどう作用するかという問題も調査対象としていたが、実験時間の延長による過度の負担は参加者の定着に悪影響を及ぼす可能性があるかと判断し、外国語(日本語およびイタリア語)の音声知覚実験に限定した。早稲田大学および日本大学で38名の学習者を対象に下記の通り3回の実験を無事終了し、現在データ分析中である。

- 第1回(2016年12月から2017年1月)日本語およびイタリア語の促音・非促音(単子音・重子音)の知覚(第1回)
- 第2回(2017年4月)タイ語および英語の語末子音調音点の知覚
- 第3回(2017年6月から7月)日本語およびイタリア語の促音・非促音(単子音・重子音)の知覚(第2回)さらに日本語およびアラビア語の長短母音の弁別

第2回の調査でタイ語および英語を刺激音として提示したのは、日本語の促音・非促音(さらにイタリア語の単子音・重子音)の処理能力とより一般的な外国語音声処理能力との間に何らかの関係が見いだせるかどうかを検討するためである。第3回の調査では、日本語および未学習のアラビア語における母音の長短対立についても調査対象とした。一連の知覚実験の結果、日本語(既知)でもイタリア語(未知)でも1回目と2回目の知覚の正確さは平均してほぼ同程度であることがわかった。これは学習者の知覚能力がすでに安定しているからであると思われる。また、日本語の促音・非促音を正確に聞き取る学習者は、イタリア語の単子音・重子音の聞き取りも正確であった。ただし、中間報告(2017年2月)でも発表したように、このことは学習者が必ずしも両言語の時間長に関する音韻対立を同様に処理しているという意味ではない。詳細は塚田他(印刷中 DOI: 10.1177/0267658317719494)で考察した。

縦断研究に加え、日本語・韓国語・タイ語・ベトナム語・ミャンマー語母語話者を対象に中国語四声の知覚実験を行った。この横断研究の目的は広い意味では日本語学習者を対象とした縦断研究同様、既存の言語知識が未知の言語処理・学習にどのように作用するかを探求することである。中国語の四声知覚に関しては、参加者を声調言語母語話者であるか否かに大別し、母語声調(タイ語・ベトナム語・ミャンマー語)の知識が未学習の中国語における声調の処理にどう関わるかについて検討し、専門学会で発表した。また、2グループの非母語話者(母語:ミャンマー語、オーストラリア英語)と中国語母語話者の四声の知覚を比較し、学術誌に(*Language and Speech*)投稿した。

滞在中は定期的に早稲田大学国際教養学部の関連ゼミに参加し、担当教官および大学院生と意見・情報交換を行った。可能な限り、様々な勉強会、学会にも参加し、見聞を広めるよう努めた。

展望:

過去に、ポスドク研究員として滞米中に縦断研究のデータ分析・発表の経験はあるが、今回初めて自力で縦断研究を開始し、3回にわたるデータ収集を2大学(早稲田大学・日本大学)で実施した。初回の研究調査倫理審査申請が承認されず、データ収集開始が遅れるなど、想像以上の難題であったが、多くの方々のご協力で貴重なデータを入手することができた。これは長期滞在型研究の最大の利点である。このデータを存分に活用するため、引き続き分析・考察を進め、学会発表・論文執筆に専念したい。具体的には *Second Language Research*, *Journal of Second Language Pronunciation*, *Journal of Speech Language and Hearing Research* などの査読付き国際学術誌に投稿し、*Australasian International Conference on Speech Science and Technology* (2018 in Brisbane, Australia), *International Congress of Phonetic Sciences* (2019 in Melbourne, Australia), *New Sounds* (2019 in Tokyo, Japan) などの権威ある国際学会で広く研究成果を発表することを目指す。さらに、滞日中に同じく博報財団招聘研究者の玉栄先生(内蒙古大学)との共同研究を計画し、研究助成金申請の第一段階の手続きをふんだ。先生のご協力をいただき、国立国語研究所でモンゴル語母語話者一名に依頼し、パイロット実験を行った。今後、同様の手法でモンゴル語母語話者の中国語四声の知覚に関するデータを収集し、これまでに収集・分析・発表した他の母語話者の結果と比較し、母語の影響などを調査する予定である。

日本語学習が母語の発音に及ぼす影響に関しては、学習初期段階ではその影響が限られていると思われることから、学習経験の長い上級・超級者を対象に今後も調査を継続し、言語習得のみならず言語損失・維持についての理解を深めたい。学習者の言語背景についても、滞日中に初学者や英語母語話者の参加者を見つけるのが困難であったので、引き続き今後の課題としたい。